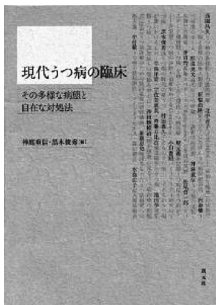


## ■ 書 評



### 現代うつ病の臨床：その多様な病態と自在な対処法

神庭重信, 黒木俊秀 編集  
創元社

2009年8月  
320頁, 定価 3,990円

本書はうつ病の社会的意義, 多様な概念, 治療並びに対処法について, 2008年の第5回うつ病学会における18名の発表を収録したものである。この種の書物は, とかく編集者の意向によって著者がそれぞれの分野を分担して執筆し, その結果として互いの領分を侵さないようなかたちで, つまり教科書的なスタイルになりがちである。しかし本書は学会発表をひな形とするという性格のゆえか, 各論文が他の領域と重なることを意に介せず, 自在に所論を展開しており, そのことが魅力となっている。教科書ではないからうつ病に関するすべての領域を網羅しているとはいえないが, 臨床家であれば誰でも興味を引かれるテーマについて複数の著者が異なる視点から論じていることが魅力である。

身体医学における循環器疾患, 悪性腫瘍と同じく, 精神医学におけるうつ病はEBMの牙城である。しかしEBMの嚆矢となった循環器疾患では, 1991年のCAST study以来20年近くが経過しているながら, 近年の国際的なガイドラインでは重要なdecision makingのうち信頼できるevidenceが揃っているのは20%にすぎないとされる。残

りのevidenceが出揃うまでの数十年間, 果たしてEBMだけを頼りにすることができるだろうか。抗うつ剤の効果について再考がなされていることは上に述べたとおりである。こうした限界を考えると, EBMに代表される研究のツールとして作成されたDSM-III以来のうつ病概念を臨床の場においても守り続けることが果たして妥当なのだろうかという疑問がわく。本書ではこの共通する疑問を巡って, 現在望みうる最も豊かな論考が各方面から繰り広げられている。なお付言すればEBMの本質は一般的なevidenceをもとにした個別の患者との対話であるから, 本書のような論考は, EBMにとっても歓迎されるはずである。

冒頭を飾る現代社会とうつ病についての論考に続いて, うつ病の概念についての論考が実に11編も収録されている。治療についての論考は, いわゆるEBM的な治療ではなく, 症状への対処, 症状とのつきあい方などを含んでいるが, それをまとめて治療論ではなく養生論と題しているのが心憎い。各論文は便宜的にこのように分類はされているが, いずれも診断, 治療, 社会などの相互作用についての一家言を含んでおり, またその主張は著者の臨床ないし研究によって具体的に裏打ちをされており, 大変興味深い。本書はいわば, 数行の診断基準を読んで, ガイドラインに沿った薬を振りかけるような治療に対する壮大なアンチテーゼともいえる。もちろん単にEBMを無視したような稚拙な議論ではない。随所で共鳴しあう著者たちの主張は, 私たちに改めてうつ病臨床への興味をかき立てるであろう。臨床家必読の一冊として, 様々な患者に触れるたびに読み返したい好著である。

(金 吉晴)